

人文学会報

84号
2021. 3. 18

事務局

〒890-0005 鹿児島市下伊敷二丁目52番1号
鹿児島県立短期大学 文学科 日文資料室

鹿児島県立短期大学 人文学会

電話(〇九九)二三〇一一一一

〈研究室だより〉

近況

望月 正道

コロナ禍での二度目の卒業シーズンを迎えています。この間、県短でも短期間でしたが全学休校（一部は遠隔授業で継続実施）となり、サークル活動や国際交流に支障が出るなどしていますが、ニュースで見聞きする都会の大学に比べれば平穏な日々を送れているのも確かかなと思います。

ところで、この号から発行回数が年二回から年一回となり、例年秋の号に掲載してきた既に卒業した先輩たちの近況と、春の号に載せてきたその年卒業する

二年生の声を併せて掲載することになりましたが、これはコロナとは無関係で、論集『人文』休刊に伴う人文学会活動の見直しによるものです。当面このスタイルが続くと思いますので、よろしくお付き合いください。

中講義までに新しいネタを補充しておかなければなりません。何かお気付きの方は、望月までお知らせいただけただら有り難いです。

(文学科日本語日本文学専攻 准教授)

私事ですが、県立短大での勤務もあと一年で定年となりました。昨年は公開講座で、コロナ禍でインバウンド客の少ない今が観光案内板やパンフレット等の外国語（特に中国語・韓国語）の間違いや不統一を直すチャンスといった与太話をさせていただきましたが、今年も第二部集中講義で同趣旨の話をしようと思っております。写真は高麗橋の近くの案内板ですが、どこがおかしいか判りますよね。（答えは、14ページの編集後記の後にあります。）ただ、間違いは見つけた端から県・市にお知らせしているため、夏の集

 **偉人誕生地(加治屋町)** →
Kajiyamachi : Birthplace of Great Men 70m
観光咨询处 観光咨询处 관광 안내소

 **大久保利通銅像** →
Statue of Okubo Toshimichi 450m
観光咨询处 観光咨询处 관광 안내소

 **維新ふるさと館** →
Museum of the Meiji Restoration 150m
観光咨询处 観光咨询处 관광 안내소

 **シティビューのりば** ↗
City View bus Stop 300m
旅游专线巴士站 旅游專線巴士站 시티뷰 버스 승차장

 **平田公園** ↓
Hirata Park 1020m
観光咨询处 観光咨询处 관광 안내소

子どもたちの笑顔と共に



榎田 有紗



県短を卒業して七年が経とうとしています。二〇二〇年は、私自身にとっても、日本中世界中にとっても、新型コロナウイルスの感染拡大により今までと異なる一年となりました。県短の皆様にとっても大変な一年だったと思います。

私は現在、鹿児島市内の児童クラブで放課後児童支援員として働いております。小学一年生から六年生までの子どもたちと、平日下校後の時間や土曜日、長期休業の時間を一緒に過ごしています。

この一年で、私たちの周りでも変わったこと、変えなければならなかったことが多々ありました。昨年までは、子どもたちは、向かい合って座り楽しそうに遊んだりお菓子を食べたりする姿が見られました。今は全員が同じ方向を向き対面で座らないように気を付けています。

また、飲食中の会話はしないように伝えており、子どもたちもきちんと守っています。友だちと話しながら楽しく食べた気持ちをぐっと我慢し、静かに食べている子どもたちの健気な姿を見ると切ない気持ちになります。同時に、子どもたちが今の日本や鹿児島状況を、大人が思っている以上に分かっているのだなとも感じます。室内で遊ぶときも、一つの遊びに人が集中しないように、人数を決めたり、時間を区切ったりして工夫して遊んでいます。

そして何よりも変化を感じることは、マスクの着用です。今では当たり前前の光景になりましたが、まさか季節を問わず自宅以外で、四六時中マスクを着用する生活になるとは思ってもみませんでした。児童クラブでも子どもたちも私たち職員も全員マスクを着用しています。マスクを着用するようになって感じることは、マスクで隠れている子どもたちの口元の表情や動きが、私が思っている以上に大切だったということです。特に、子どもたちが大きく口を開けて笑う可愛ら

しい姿を見ることができないのはとても淋しいです。ですが、隠れているからこそ、今見えている目の動きや表情に目を配ったり、子どもたちが発する言葉に耳を傾けたりして子どもたちがその時伝えようしていることを、しっかりと受け止めていきたいと思っています。

児童クラブの生活以外でも、学校行事が縮小されたり、遠出の家族旅行ができなくなったりと子どもたちが今まで当たり前になってきたことが出来なくなりました。更に日々の生活の中でも、マスクの着用、こまめな手洗い・消毒、毎朝の検温等多くの変化がありました。私たち大人でも変化に順応していくのは簡単なことではありませんが、子どもたちも変化を受け入れ今の範囲で出来ることを精一杯頑張っています。

新型コロナウイルスの感染拡大が収まらず不安な日々ですが、今の状況に負けず日々頑張っている子どもたちの姿を見ると、私も負けずに頑張ろう！と思います。これからも、希望を持って笑顔で子どもたちと共に過ごしていけたらと思います。

ます。そしていつの日か、マスクを外して子どもたちと笑い合えることを願いたいと思います。

今回は人文学会報への寄稿にお声がけいただき本当にありがとうございます。これからも、県短の卒業生としての自覚と誇りを持ちながら、自分の選んだ道を進んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、鹿児島県立短期大学の益々のご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

(二〇二四年三月 日本語日本文学専攻卒業)

(※卒業生の原稿は、秋に執筆していただいています。)

神にお仕えする仕事

川原 晴香

シワのない白衣と暗い紫の袴をピシッと着る。これが仕事時の正装であり、ここから私の仕事は始まります。私は鹿児

島県立短期大学を卒業後、4月に霧島神宮に就職しました。一週間の研修期間と3か月の見習い期間を終え、7月からは録事として正式に働いています。仕事内容としては、社頭で神符守札を授与したり祝詞を新しく書き直したりもしていますが、御朱印の書き添えが主です。参拝者が持つてこられた御朱印帳に「天孫降臨之地」と日付けとを書き入れ、最後に霧島神宮の印を押します。コロナの影響もあり例年と比べ参拝者は減っているようですが、連休の中日などは1日に五千人を超える方々がお参りに来られます。そんな日は私だけでは手が足らず、神職さん数人と共に1日に何百冊という御朱印帳に書き添えます。御朱印の山をそばに置き、ただひたすら目の前の御朱印帳に文字を書くだけであつという間に時間が過ぎてしまいます。

初めのうちは仕事をするとというより、多くのことを覚えることに必死でした。仕事内容はもちろんのこと、霧島神宮に務める上で知っておかなければならないことが沢山あるからです。様々な祭典に

ついてや、大前作法、霧島神宮の御祭神に関する事など、知らないことばかりでした。神様の話は短大の授業でもたまたに耳にしましたが、正直なところ、大昔の人が考えた不思議な話としか捉えていませんでした。しかし、ここでは神様の話は歴史として扱われており、知れば知ると現実の世界が私の中で繋がっていくような感覚があります。それは面白くもあり、私を段々と信心深い気持ちにさせてくれるように感じます。未だ私は知らないことが多く、学ばなければならぬことは沢山あります。働きながら徐々に知識を増やして、神にお仕えするものとして相応しい人間に近づいていきたいです。

月に一回ではあるものの、師範を取った今でも書道教室に通っています。仕事をしながら書道が続けることは忙しくも感じますが、辞めようとは少しも思いません。書道と一緒に習っている硬筆も師範を目指しているというのもありますが、自分の文字を見つめ直すという意

味で、この月に一回の書道は私にとってとても貴重な時間だからです。仕事の忙しい日だと、いかに速く書くかということに気を取られたり、ずっと同じ文字を書き続けたりして正しい字形から外れてしまっていないか不安になります。そして友人の母や祖母の知り合いが御朱印をもらっていたことを後から知り、ドキッとしたこともしばしば経験しました。

「私にとってはおたくさんの御朱印でも参拝者にとつてはたった一つ」です。これは神職さんにも言われていることであり、書きながらも私がずっと忘れてはいけないことだと思っています。霧島神宮に勤めて早くも半年以上経ち、霧島神宮での仕事や環境にも慣れてきましたが、自分の字を磨く努力もしながら、一枚一枚丁寧に書いていきたいと思っています。

一見すると文字を書くだけの単調な仕事かもしれませんが、小学生の頃からずっと続けてきた書道を活かすことができ、霧島神宮の参拝の証となるものをお渡しできる仕事に就けたことを誇ら

しく思っています。書道の基礎基本と初心を大切に、ただただ仕事に一生懸命取り組むことが私の日々の目標です。そして参拝者が御朱印帳を見返した時に霧島神宮を思い出して笑顔になれるような御朱印をお渡しし続けることができたらいいなと思っています。

(二〇二〇年三月)

日本語日本文学専攻卒業)



県短の

ネットワークで乗り越えた 海外での就職活動

中原 瑞希

私は鹿児島県立短期大学を3年前に卒業しました。県短に入った時から決めていた卒業後の進路は、海外の大学に留学することです。私は小さな頃から英語と触れ合う機会があり、海外留学が私の一つの大きな夢でした。その夢を叶えるた

めに、私は迷わず県短の文学科英語英文学専攻を高校卒業後の進路として選択し、2年間英語の勉強に励みました。その結果、県短卒業時にはTOEICで目標としていた点数を達成し、県短の編入協定を利用して、アメリカのウイスコンシン州立大学リバーフォールズ校（通称UWRFL）への編入学し、夢を叶えることができました。

しかし、夢だった留学が始まったころは、正直なところ、私が想像していた楽しい留学生活とは程遠いものでした。特に1年目は、慣れない海外での生活で右往左往したり、すべて英語で行われる授業についていこうと必死で勉強に励んでもなかなか結果が出なかったり、大変なことも沢山ありました。しかし、徐々に英語や授業内容が分かるようになって、友達ができたり、自分の努力次第で環境が変わっていくことに気づきました。

2年目には、卒業に向けて就職活動を始め、日本のある企業とご縁があり内定を獲得することができました。私は日本

での就職活動は経験したことが無いのですが、もしかすると、海外での就職活動は日本での就職活動とは少し違うかもしれません。ここでは少し海外での就職活動について書いてみたいと思います。

私の就職活動でキーになったことは、これまでに築いてきたネットワークでした。特に、県短出身でウイスコンシン州立大学に進学した先輩方や県短の先生方のアドバイスがとても役に立ちました。

海外での就職活動をするにあたり、私はまず、県短の先輩方に連絡を取るところから始め、そこで知った毎年11月に開催される「ポストンキャリアフォーラム」というイベントに参加することに決めました。

この「ポストンキャリアフォーラム」はいわゆる日本の就職活動で行われる合同企業説明会と、面接試験が一体化したイベントです。ポストンの他にもサンフランシスコやシドニー、上海など、世界各地で開催されます。主に海外留学を経験し、母語の日本語の他に英語やその他の言語を武器に就職活動をするバイリン

ガルの日本人大学生を採用したい企業ですが、日本から多く参加しています。今年はコロナの影響でオンライン開催ですが、私が参加した二〇一九年は、合計二百社以上が参加していました。

キャリアフォーラムは通常3日間開催されます。この3日の間に、参加学生は事前にエントリーした企業の会社説明を詳しく聞き、このイベント期間中に面接を受け、イベント中に内定が決まります。そのため、このイベントに参加する前に、エントリーシートや履歴書を準備したり、面接の内容を考えたり、沢山の準備をしなければいけません。このイベントで私の人生が決まると思うと、準備期間から当日までずっと緊張して、あまり十分に睡眠もとれませんでした。緊張した甲斐があり、希望していた会社から内定を頂くことができました。

無事就職活動が終わった後は、コロナのパンデミックの中で、卒業課題や学校生活に集中することができて無事留学生生活を終えることができました。ウイスコンシン州立大学での2年間は自分にとって

かけがえない思い出と貴重な経験となりました。夢だった留学生活や海外での就職活動を経験できたのは、県短で学んだ経験やネットワークがあったからだと思います。また、多くの支えがあったからこそ乗り越えられたと思います。これからは自分が先輩のみなさんの役に立てるように、さらに高みを目指して頑張っていきたいと思います。

(二〇一八年三月英語英文学専攻卒業、二〇二〇年度ウイスコンシン州立大学国際関係学専攻卒業)

編入学後の生活について — 頑張ってみると、楽しい!!

本村 優奈

私は卒業後、鹿児島大学に編入学しました。今回は県短時代の思い出を少し、そして卒業後について報告したいと思います。

私にとって県短時代は進路について熟考した大切な期間でした。1年前期に受講した「比較文化」の講義は、今でも配布されたプリントを持っているほど、とても印象に残っています。お伽話を足掛かりに、大衆文化やジェンダー等について学びました。生活する中で感じていた違和感や疑問の根幹となる部分が紐解かれるような感覚がありました。

この講義が契機となり、アメリカ文学を学べる小林ゼミに所属することになりました。ゼミをはじめ県短での学びは、編入学後の生活に繋がりました。

鹿大の講義ではゼミ活動に一番力をいれました。ゼミの振り分けでは、希望どおりアメリカ文学ゼミに進むことができました。私が所属したゼミでは、英語で論文を読み、毎週決められた担当者がプレゼンをした後に、ゼミ生全員でディスカッションを行います。答えに詰まるような難しいトピックでも、時間が足りなくなるくらいディスカッションを繰り返して、学びを深めました。ゼミを通じて出会った圧倒的な読書量・勉強量を持つ友

人や、多くの示唆を与えてくれる先生に大いに刺激を受けて、能動的な学びをすることができました。ただ最初の頃は、読み応えのある英文そのものを理解することに頭を悩ませていました。このような私とは反対に、難なく理解しているようにみえた周りのゼミ生を見て落ち込むこともありましたが、図書館に籠って時間をかけて課題に取り組みました。

また、冬に催された英語系ゼミの合同合宿も印象深いです。そこには、アメリカ文学に限らず「英語」という共通の分野に関心のある学生達が集まり、4年生の卒業研究の中間報告を聞いたり、他ゼミの人達と話をしたりする中で、日頃の学習成果をお互いに確認していました。今まで知らなかった、興味がなかった学問分野にも関心を持てる機会であったと同時に、普段関わりがない人とも親睦を深めることができました。

次は課外活動についてお話しします。私はweb上で情報発信をする学生団体に所属しました。学部を超えた仲間と同じ目標に向かって切磋琢磨し、時には社会

人の方々とも一緒に活動しました。具体的には、編集者として記事の執筆をしたり、鹿児島テレビ局と協力して制作したネット番組に出演者として携わったりしました。ここでの経験を通じて様々な分野で熱意を持って活動している人達を目の当たりにしました。活動する中で何度かトラブルもありましたし、時間をかけて執筆した記事の閲覧数がなかなか伸びずに悔しい思いをすることがありました。しかし、それらを一つずつ解決していく過程で、上手いかわないことが重なる時は「自分が実現できる、ギリギリのラインにチャレンジをしているから上手いかわないのかも！成長している途中だ！」と前向きに考えるようになりました。

また他には、県短時代に貯めたアルバイト代を全て使い、半年間、毎週往復8時間かけて福岡のアナウンス・スクールに通学したり、短期間ではありますがラジオ局で学生パーソナリティとして活動したりしました。

今、県短時代の私を振り返ると、特に

1年生の頃は将来への道筋が見えず不安で曖昧模糊とした状態でした。しかし指導教員だった小林先生に何度も背中をおされ、在学中は教育実習や編入学試験等に逃げずに取り組み、希望していた進路に進むことができました。本当に感謝しています。また県短ならではの落ち着いた雰囲気と、学生数が比較的少人数であるためにアットホームである環境は、自分の関心があることに専念するための最適な環境でしたし、「生涯の友」と思えるような友人もできました。

このように県短での学びや出会いがあったからこそ、編入学後も、一生懸命やりたいこと全てに挑戦できました。県短での思い出を胸に、これからも頑張っていきたいと思えます！

(二〇一九年三月
英語英文学専攻卒業)



〈卒業にあたって〉

友人たちに支えられて

文学科日本語日本文学専攻

堂園 萌愛

私が鹿児島県立短期大学に入学することを決めたのは、二年前の三月でした。その時の私は春からの短大生活が楽しみである反面、今までよりもさらに詳しく専門的な内容になる授業についていけるのか、知り合いもほとんどいない中でうまく短大生活を送っていけるのか友人をつくるのが出来るのかとても不安でいっぱいでした。初めて日文のみんなと顔を合わせたのは入学式前のオリエンテーション。自己紹介をしたり、これからのことについて説明を受けたりしているうちにあんなに不安だったことが楽しみへと変わっていました。スーツを着て参加した四月の入学式から私の短大生活が始まりました。日文のみんなはとても優しく、はじめはお互い緊張していたけれど、

少しずつ話をするようになり、気が付けばたくさんの友人が出来ていました。最初のころはお互い敬語で話していたことも今思い返してみると懐かしく感じます。

短大では高校までとは異なり自分で授業を選択したり、授業ごとに教室が異なっていたり、はじめは戸惑うことも多かったですが、だんだんと学校生活にも慣れていくことが出来ました。この二年間を振り返ってみると私は多くの友人に支えられていたことを卒業を目の前にした今、とても感じます。授業や教室の移動など、友人からの連絡で知ることもしかったし、期末試験の前には分からないところを教えてもらったり、不安な部分を一緒に勉強してくれたりとても感謝しています。特に、私は教職課程をとっていて、教育実習に行くための準備として行う模擬授業のために授業の空き時間に何度も生徒役をお願いして私の授業に付き合ってもらいました。三週間の教育実習を乗り越えることが出来たのは、指導してくださった先生方とアドバイスを改

善すべき点を教えてくれた友人たちのおかげだと思っています。また、高校と大きく異なるのがゼミ活動です。私は、中国文学ゼミに所属し漢文を読むなど中国の文学作品に初めて触れました。これまでに中国の文学作品を読んだことがなかったので、卒業論文では思うように書くことが出来ず、ゼミの先生に何度も添削していただいたり同じゼミの仲間から助言をもらったりして励まし合いながら完成させることが出来ました。本当に周りの人の支えのおかげだと感じます。

私が短大生活で印象に残っていることは教育実習と文化祭です。教育実習では授業を自分で組み立てて進めることの難しさを実感しました。計画通りに授業が進まず反省点多かったけれど、授業後に生徒から「先生の授業、わかりやすく楽しかった」といつてもらえてとてもうれしかったです。休み時間に生徒との交流もできて、改めて人に教えるということの難しさを感じることができ、自分にとって大きな経験になり、成長できたと思います。また、学祭では、クラス一

丸になって劇の練習をしたり背景や小道具を作ったりする中でよりクラスの絆が深まったのではないかと思います。授業の空き時間を使ってみんなで集まって一つの行事を作り上げられたことが楽しく印象に残っています。二年間を振り返ってみると、友人との思い出がたくさん出てきます。たくさんの人に支えられ、楽しかったり大変だったり様々な友人との思い出をたくさん作ることが出来た二年間でした。私は、四月から編入するのでこの二年間で培ったことを生かして頑張っていきたいと思っています。最後になりましたが、ここまで支えてくれた両親、指導してくださった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

充実した二年間を共に過ごした大好きな仲間たちのこれからに幸せがたくさんありますように。みんなありがとう！



私の進む道

文学科日本語日本文学専攻

中原 弘乃

卒業を前にして思うことは、鹿児島県立短期大学で過ごした二年間はとても短く、充実した学生生活だったということです。これから共に学んでいく友人たちと初めて会ったあの日を、まるで最近のことのように思い出します。

初めて、日本語日本文学専攻の先生方やみんなと顔を合わせたのは、入学前に行われたオリエンテーションでした。自分の望んでいた進路とは違ったため、この時の私は、これから上手くやっていくのか自信がありませんでした。また、高校時代の友達がいらないからの環境ということもあり、期待や楽しみよりも、緊張と不安の方が大きかったことを今でも覚えています。しかし、日本語日本文学専攻のみんなはとても気さくで明るい性格の人が多く、この時感じていた緊張

や不安はすぐになくなり、先生方のもとでみんなと一緒に二年間頑張っていたと思います。悩みごとを相談すれば、自分のことのように一緒に考えアドバイスをしてくれたり、授業の休憩時間や昼食時間に何気ない話で盛り上がってくれたりする友人ができたことを本当にありがたく感じ、みんなと出会えたことは私の財産になりました。

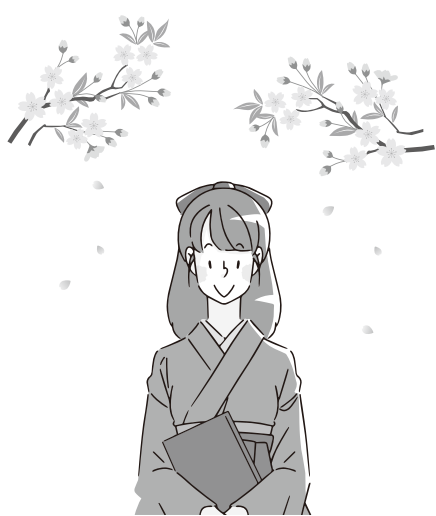
今、入学当初の自分に言いたいことがあるかあるかと問われたら、「あの時は、自分を悔やんでいると思うけれど、鹿児島県立短期大学を選び進んだ道は間違っていないかったよ」と自信を持って言えるくらい、素敵な出会いがあり、笑顔の絶えない楽しい学生生活を毎日過ごすことができました。

私は、小学校のころから本を読むのが大好きでした。また、高校の時に所属していた書道部でかなを中心に学んでいたことから古典に興味を持ち、大学でさらに詳しく学びたいと思ったのがきっかけで、日本語日本文学を専攻しました。私にとって、専攻の授業は大好きな文学を

専門的に学べる初めての機会でもあり、充実した時間となりました。将来的にも、専攻を活かした職業に就きたいと最初は考えていましたが、就職活動を通して幅広い職種を知ることができ、自分の適性に合った仕事は何か、深く考えるようになりました。就職活動を進めていたころ、一年生から所属していた大学生協の学生委員として、新入生の入学手続きの手伝いをする機会がありました。これから始まる新しい学生生活に不安を感じている新入生の相談の対応をして、自分はこのように人と関わり、誰かの助けになるような仕事がしたいということに気づきました。この経験に加え、自分が仕事をしていく上で何が大切かを考えた結果、金融関係の仕事に就職することを決めました。新たな目標に向かって前に進めたのも、進路相談や面接練習で何度もお世話になった学生課の方々や、自分のやりたいことを精一杯すればいいと背中を押してくれた家族のおかげだと思います。お世話になった方達にこれから恩返しできるように、自分の目標に向かって

頑張っていきたいと思っています。

この二年間で、たくさんの人と出会い、様々な経験ができました。もし、鹿児島県立短期大学に入学していなければ、今の自分はなかっただろうと思うと、入学して本当に良かったと心から思います。この春、私はいよいよ社会人になります。新たに始まる社会人としての生活は、不安の方が大きいですが、私にとって貴重な二年間の思い出がこれからの私の心の支えになってくれると思っています。今までのようにみんなと会えなくなることはとても寂しいですが、いつかまた笑顔で会えるよう、今自分のできることを最大限に頑張っていけます。



私の短大生活



文学科英語英文学専攻

吉田 啓悟



私が県短に入学した日を振り返ると、新しいスーツを着て入学式に参列した当時の私は、期待や希望に満ちあふれていたのだろうか。県短が第一志望ではなかったことに加え、自分が英文専攻でたった一人の男子学生という現実に入學式当日に直面した私は、少し悲観的で不安だったような気がする。しかし、卒業を目前にした今の私は、もし可能なら、もう一度県短の学生生活を送りたいと自信をもって答えるだろう。それほど県短で過ごした時間は楽しく充実したものだったからだ。

には様々なイベントがあり、自治会の新歓キャンプ、体育祭、ハロウィン、学内開放などの行事を通して同じ学年の英文専攻の皆と仲良くなれたのはもちろん、英文専攻の先輩方も仲良くなることのできたからだ。私の一学年上には二名の英文の男子学生がいて、授業がない日には、先輩方が雄川の滝、韓国岳、鹿屋にある美味しい焼肉屋さん、温泉、海など、車で近場から遠いところまで色々な所に連れて行ってくれた。中学や高校では、年上の友人がいなかった私にとって、少し年上の先輩方と共に色々な体験をしたことは、とても新鮮で楽しく、忘れられない思い出である。

活が始まってすぐ気付かされたのは、スピーキング力とリスニング力の低さだった。受験の為に英語の文法とライティングだけはしっかりと勉強していた自分は、語学学校の最初のレベル判断テストで良い点を取り上のクラスに入ってしまった。最初の数週間は、皆が何を言ってるか全く分からない、自分が言いた事が言えない、でも黒板に書いてある文法だけは知っているという状況に陥ってしまった。この状況から早く抜け出すために、私は洋画を見たり、自分から積極的に英語を話すことを心掛けた。その結果、スピーキング力もリスニング力も着実に身につけていると実感できるようになり、カナダへ来て数か月後には語学学校で一番レベルの高いクラスに上がることができた。語学学校では様々な国の出身の方々がいて、それぞれの文化や伝統などをシェアするのがとても楽しく、幸い私は彼らとすぐに仲良くなることができた。このように語学学校での友達にも恵まれたが、私はホストファミリーにも恵まれた。ホストファミリーは私のことを本当

の家族のように扱ってくれて、ホームステイ先の家は、私にとって、とても居心地の良い場所だった。このように、留学では語学力だけでなく、人との繋がり的重要性を再確認し、さらに多様な文化に関する知識も修得することができた。

帰国後、私は留学の経験を県短での学びの集大成にしたいと思い、卒業論文では「留学のストレスとストレスコーピング（対処法）」について研究した。まずは留学とストレスに関する先行研究を探し、比較的大規模な日本で行われた研究を見つけ、そこから芋づる式に英語で書かれた先行研究につながった。これらの先行研究に基づいて、留学中のストレスサー（ストレスの原因）である、対人関係問題、学業問題、環境に関する問題、健康生活問題、経済的不安の5要因に着目し、この5つのストレスサーとそれに対する対処法、そして、その効果について尋ねるアンケートを作成し、留学経験者に配布した。英語の論文を読むのとても難しかったし、人づてで留学経験者を集めるのは苦勞したが、最終的には六

十一人の調査協力者からデータを集めることができた。前述したとおり、私は語学学校の友達やホストファミリーに恵まれていたため、対人関係に大きなストレスを感じたことはなかったが、多くの人が対人関係にストレスを感じていることをアンケート結果から通して知り、自分の留学生活がいかに幸運だったかを改めて実感した。そして何より、卒業研究の結果からだけでなく、卒業論文を英語で書き上げ、またその成果を英語で発表するところまでに辿り着くまでのプロセスからも多くを学ぶことができた。自分課題を見つけて、その課題を探索し、自分の言葉でまとめるといふ卒業研究を通して大きく成長出来たと感じ、また自信になった。

語学留学を経験した私の次の目標は、海外の大学に通ってその大学を卒業することだ。その為に、もっと勉強を頑張りたい。最後に一言、県短で出会った全ての方にお礼を申し上げます。

◆◆◆ 県短での学生生活を通して ◆◆◆

文学科英語英文学専攻

増田 雪乃

私は、県短での学生生活を通して貴重な経験を沢山することができました。ここではそのなかでも就職活動とゼミについて紹介したいと思います。

就職活動では、私は一年生の十二月から合同企業説明会に参加し、早めに就活を始めようと思っていました。コロナの影響で二月から全ての合同企業説明会がオンラインやオンデマンドでの開催になり、延期や中止になることもありました。誰もこうなることは予想できず、全ての就活生が不安や焦りでいっぱいだったと思います。もちろん私も例年とは違う就活に不安でいっぱいでした。そして私の行きたかった業界はコロナの影響もあり厳しいと判断し、鹿児島で一から探し直すことにしました。本当に自分の行きたい企業が見つかるのか不安で、なか

なか前向きな気持ちになることができま
せんでしたが、学生課の方やゼミの先生
が相談に乗ってくださり、少しずつ就き
たい業種や職種を絞っていくことができ
ました。

実際私が本格的に就活を始めたのは四
月でした。初めての就活に何をしてい
か分かりませんでした。学生課の方が
履歴書添削から面接指導までサポートし
てくださいました。結局私の内定が決ま
ったのはつい最近の一月です。内定を頂
くまで毎日不安で、先に就職先が決まっ
てる人と比べて落ち込んでしまうことも
ありました。やっと自分と縁がある就
職先が見つかりとても嬉しく、諦めずに
頑張つて良かったと思つています。そし
て県短はなにより、就活や編入のサポー
トが手厚いです。一人ひとりに寄り添っ
て話を聞き、最後まで後押ししてくださ
るので、関わってくださった方にはとて
も感謝しています。

またゼミ活動は、一年生の後期から一
年半の間、楽しくもあり大変でもありま
した。私は英語力を向上させるため、異

文化コミュニケーション、英語教育を主
に研究するゼミに入りました。このゼミ
では、基本英語でディスカッションやプ
レゼンを行い、みんなで協力して研究テ
ーマについての理解を深めていきまし
た。

一年生の後期には、近くの小学校の児
童とワークショップを行いました。私た
ちゼミ生が、小学生が楽しめて英語に触
れることができるような活動を企画し、
その準備から実施まで自分たちで行いま
した。もちろん小学生に満足してもらい
たいという気持ちがあったので、準備に
はたくさん時間をかけ、空コマでも集
まったりしていました。準備はワークシ
ョップの内容だけでなく、当日は雨天が
予想されたので、子どもたちが濡れた床
に座らずに済むように、学生会館の廊下
にタオルを貼つたり、小学生が喜ぶよう
な飾りつけや名札を作つたり、楽しい雰
囲気にするためのバックミュージックを
かけたりと会場設営にもこだわりました。

当日ワークショップが始まると、私達

も小学生も緊張していましたが、活動を
していくうちに英語でコミュニケーション
をとり、楽しんでる様子が伝わって
きたので、準備を頑張つてよかったとい
う達成感が大きかったです。同時に私
は、小学生のレベルに合った英語で学び
を提供することと、小学生に楽しんでも
らうことを両立させる難しさも感じまし
た。子どもに目線を合わせることも大事
だと思いました。

そして、一年の二月頃から、卒業論文
が本格的にスタートしました。まずテー
マを決めて、一年生のゼミ合宿で英語で
プレゼンをしました。二年になるとさら
に先行研究を調べてゼミで発表したり、
調査方法を決めたりと次から次へと課題
があつて前述した就職活動との両立はな
かなか大変なものでした。私は英語の授
業での母語使用の是非をテーマに研究を
行い、ネイティブの英語の先生にインタ
ビュー調査を行いました。どうやって英
語でまとめたらいいかわからなくなり途
中で立ち止まってしまいいかなかなか書き進
めることができない時には、先生がアドバ

彙報

◎人文学会行事日程

二〇一九年

十月十八日 臨時総会

『人文』休刊を決定

二〇二〇年

三月十八日 「会報」第83号発行

四月十七日 総会・役員交代

(会長≡文学科長) 土肥

(庶務) 望月

イスやサポートをしてくださり最終的には納得のいく卒業論文が書けたと思います。卒業論文発表会は、ゼミ生全員スーッではっちり決めて、発表は英語で行いました。他学科の先生からの難しい質問に少し戸惑いましたが、ゼミ生一丸となって乗り越えることができました。私は閉会の挨拶の担当だったので、最後まで緊張していましたが、短大の学修の成果として、全て英語でやり遂げたことは、とても達成感があり、自信になりました。

二年間という短い学生生活で大変なこともたくさんありましたが、県短で素敵な友達と出会えたおかげで、つらいことも乗り越え、毎日楽しく過ごすことができました。私の県短ライフは友達存在なしでは充実したものにはなってなかったと思います。先生方はもちろん友達との出会いに感謝して、これからもこの関係を大切にしていきたいと思っています。



2019年度 人文学会決算報告書

収 入		
前年度繰越金		960
学生会員会費		66,000
普通会員会費		34,000

収入計		100,960
支 出		
休刊案内書		10,796
会報印刷費		89,242

支出計		100,038
次年度繰越金		922



◎鹿児島県立短期大学人文学会会則

(一九七七年六月三日制定)

(二〇二〇年四月十七日最終改正)

第一章 総 則

第一条 本会は鹿児島県立短期大学人文学会と称する。

第二条 本会の事務所を鹿児島県立短期大学文学科日文資料室におく。

第三条 本会は人文諸科学の発展に寄与し、会員の研究振興を図ることを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1 研究調査・資料の収集
- 2 『人文学会報』の発行(年一回)
- 3 研究会・講演会等の開催
- 4 その他役員会が適当と認めた事業

第二章 会 員

第五条 本会は次の会員をもって組織する。

- 1 普通会员 鹿児島県立短期大学に所属し、人文諸科学に関心をもつ教員

- 2 学生会員 鹿児島県立短期大学に所属し、人文諸科学に関心をもつ文学科在學生

3 特別会員 本会の発展に貢献し、

役員会において認められたもの

4 賛助会員 本会の趣旨に賛同し、

普通会員と同額以上の会費を納入するもの

第六条 会員として入会しようとする者は、入会申込書を会長に提出し、役員会の承認を得るものとする。

第七条 会員は、総会において別に定める会費を納入しなければならない。

第八条 会員は、退会届を会長に提出し任意に退会することができる。

2 会員が、次の各号のいずれかに該当するときは、退会したものとみなす。

- (1) 本人が死亡したとき。
- (2) 学生会員が卒業したとき。

第九条 本会は普通会員による総会を年度始めに開催する。ただし、必要のある時は臨時的に総会を開催することができる。

第三章 役員

第十條 本会に次の役員をおく。役員任期は一年とする。

会長 一名
庶務 一名

会計監査 一名

第十一條 本会は定期的に役員会を開催する。ただし、必要のある時は臨時的に役員会を開催することができる。

第四章 会 計

第十二條 本会の経費は、事業収入・寄付金および助成金をこれにあてる。

第十三條 会費は役員会での審議を経て、総会の決議により別に定める。

第十四條 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第五章 会則改正

第十五條 本会則の改正は役員会での審議を経て、総会の決議によって行う。

附 則

1. この会則は、二〇二〇年四月十七日より実施する。

○会費に関する総会決議

(二〇一五年十一月二十日)

(二〇二〇年四月十七日最終改正)
本会の会費を次のとおり定める。

普通会員 一年二〇〇〇円
学生会員 二年一〇〇〇円

《編集後記》

『人文学会報』は文学科ホームページ (<http://www.k-kentan.ac.jp/lit/>) に掲載する予定です。『人文』論集の方は、鹿児島県立短期大学リポジトリ (<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/>) で公開しています。(望月)

【観光案内板の間違い】

「シティブューのりば」以外の中国語(簡体・繁体)と韓国語が「観光案内所」の訳語です。

また「シティブュー」の中国語訳も不審(どうも担当者が変わるたびに訳語が変わっているもよう)。

なお「平田公園」のハンダは、ここ以外ヒラタがヒラダになっていました。



〈令和2年度卒業研究標題〉

文学科日本語日本文学専攻

氏名	卒業研究標題
《土肥ゼミ …… 中国文学》	
山口 愛実	六朝志怪小説にみられる異類婚姻譚について
栢山 彩葉	『幽明録』における「死」について
堂園 萌愛	唐代伝奇における女性像について
竹之内 優華	呂布と貂蟬の関係の変化について — 『三国志平話』と『三国志演義』を比較して—
西 ひかり	『西遊記』研究 — 孫悟空の誕生と再生—
前山 紗里奈	『紅樓夢』における桂花について
《望月ゼミ …… 日本語学》	
岩川 千夏	『天空の城ラピュタ』と役割語
小川 春菜	米津玄師の歌詞分析
遠竹 芽依	ビジネスマナーサイトにおける敬語について
平江 穂乃花	本の帯における言葉の構造について
森下 舞奈	Twitterで見られる「他担狩り」という表現について
《楊ゼミ …… 日本語学・日本語教育学》	
岩元 沙羅	韓国映画・ドラマにおける日本語字幕の特徴と呼称の変化について
上山 玲奈	テレビアニメ『プリキュア』シリーズにおける、色属性ごとの一人称と文末詞の使用について
北原 瑠夏	日本語吹き替え版ディズニー映画における女性語の変化について
隈元 りおな	Jポップのヒット曲の歌詞における差別化と社会状況との関係
黒瀬 清楓	創作作品におけるバイト敬語の実態
田中 利奈	新語・流行語大賞から見る日本で流行する言葉の特徴と傾向について
徳重 朱莉	テレビドラマにおける二人称代名詞の分析 — 「あなた」「あんた」「おまえ」「きみ」を対象に—
《竹本ゼミ …… 日本文学・近代》	
迫 友梨佳	夏目漱石『心』におけるKの自殺の謎について
河野 翔	坂口安吾「白痴」における伊沢の人間性について
福井 ゆき菜	坂口安吾の桜の森の満開の下をよむ — 美の二面性—
竹下 委花	星新一作品における宇宙観 — 一九六〇～七〇年代当時の一般的な考え方との比較—
永田 舞子	筒井康隆『パブリカ』における精神治療の考察
榎本 ひかる	村田沙耶香『地球星人』に描かれる結婚観
《木戸ゼミ …… 日本文学・古典》	
胡摩窪 結	『万葉集』の人と人を遮る障害物についての考察
中原 弘乃	梅花の宴での山上憶良の歌は大伴旅人と山上憶良自身のどちらに向けて詠まれた歌なのか
鮫島 桜	紀貫之が『古今和歌集』を代表する花に「桜」を置いたのはなぜか
立野 陽菜	「ちはやぶる」の歌におけるそれぞれの枕詞の意味と役割は何か
濱平 真里奈	「源氏物語」における紫の上の女性像について
小田 夏好	『紫式部日記』女房批評にみる紫式部の女性観についての研究
池田 礼葉	『梁塵秘抄』と『今昔物語』から見る、社会的弱者にとっての阿弥陀信仰と地藏信仰について

〈令和2年度卒業研究標題〉

文学科英語英文学専攻

氏名	卒業研究標題
《英米文学演習》 (指導教員：轟 義昭)	
上 浦 妃 織	原作『魔法使いハウルと火の悪魔』とジブリ映画『ハウルと動く城』の比較研究
中 馬 風 花	『去年の冬、きみと別れ』の映画の見方と魅力
塗 園 真 優	小説『不思議の国のアリス』とアダプテーション映画の比較研究 —アリスの特徴と相違点—
平 田 朋 恵	『ロミオとジュリエット』とその映画の比較研究
森 山 夢女乃	原作『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』とアニメシリーズの比較研究 —アダプテーションのメリットと効果—
山 元 このみ	メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』研究 —「怪物」が担う役割について—
《英米文学演習》 (指導教員：Jorge García Arroyo)	
鮫 島 夏 葉	Multiculturalism Depicted in American Movies
松 岡 莉 緒	Why Disney Continues to Be Accepted and Loved in Japan
水 溜 乃 亜	Japanese Anime/ Sir Newton
諸 藤 樹 蘭	Changes in Discrimination against Women
山之口 華 音	Japanese and American Pop Music
《比較文化演習》 (指導教員：小林 朋子)	
荒 神 珠 稀	探偵小説から見る19世紀英米のジャーナリズム —エドガー・アラン・ポーとアーサー・コナン・ドイルの比較研究—
鬼 塚 由 莉 奈	ディズニー・プリンセス再考 —フェミニズムで読み解く彼女たちの存在証明—
下 南 壮 太 朗	ハリエット・タブマンとアメリカ黒人の軌跡
平 石 梨 紗 子	ポップカルチャーに内在するトリックスター・ロキ —北欧神話とMARVEL作品の比較—
松 下 未 夢	美意識の歴史から読み解くコスメ・ブランドのジェンダー・フリー化について
安 田 梨 乃	海に漂うスカーレット・レター —マーガレット・フラーと『緋文字』に見る実存主義的ヒューマニズム—
《英語学演習》 (指導教員：遠峯 伸一郎)	
瀬戸山 裕 奈	呼称の変化 —1920年代から2010年代のアメリカの黒人について—
ヤマシタ 奈生	カナダ英語の単語綴りに見られるバリエーション
池 田 佳 奈	スウェアワードの選択におけるジェンダー差
白 山 柚 佳	<i>Harry Potter</i> シリーズのポライトネス表現から読み解く日本人とイギリス人の思春期における心の変化の比較
瀬戸口 理 歩	<i>Princess Mononoke</i> における怒りの種類別に見られる言語表現の違い
西 村 歩 華	動物名を含むイデオムからみる英語圏の動物観 —馬、牛を中心に—
湯 川 拓 毅	<i>The Books of Earthsea</i> に見る話題化について
《英語学演習》 (指導教員：石井 英里子)	
吉 田 啓 悟	Stress and Stress Coping Strategies for Adolescents Studying Abroad
池 田 英美華	A Study of Junior College Students' Images of Active Learning
梶 みどり	When and Why High School Students Have Difficulty with English
福 田 琉 伽	Motivation and Interest to Learn English among Japanese and Korean Youth
前 里緒奈	Cross-cultural Gap from the Perspective of Japanese College Students
増 田 雪 乃	Instructors' Perceptions of Using L1 in Japanese EFL Classrooms